

# 社会科授業の「実践の理論化」へ向けた研究課題の探索

— ワールドカフェの模造紙にみる社会科教師の「語り」の分析を通して —

四天王寺大学 中本和彦

## I 問題の所在

### 1 社会科授業研究をめぐる現状と課題

近年、社会科授業研究のあり方が問われている。従来、2つの授業研究の方法論が提案されてきた。梅津正美は、次のように述べている<sup>1)</sup>。

社会科教育学研究における授業研究では、「あるべき社会科授業」を明示するという（規範的授業研究の）立場から、主に2つの方法論が提案されてきた。第1は、授業開発研究である。目標・内容・方法・評価を貫く社会科授業理論を明示し、理論と授業計画及び実践とを結びつけて論理整合的に説明することを基本的な方法とした。第2は、授業評価研究である。実践事実を確定し、その分析を通して実践と授業理論のズレを指摘し改善の具体的な手立てを論じる方法を基本とした。

また、草原和博は、教科教育実践を、図1のように「授業理論」・「授業モデル」・「授業計画」・「授業実践」の重層性で捉えた<sup>2)</sup>。

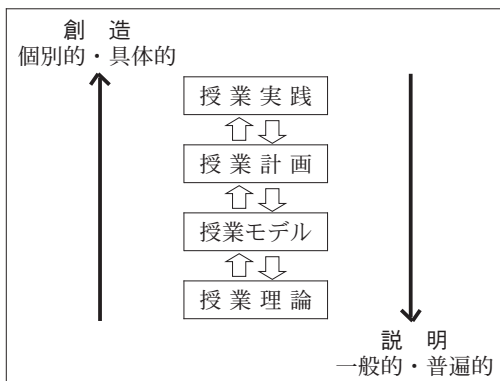


図1 授業（仮説）の重層性と研究方法

草原のように教科教育実践を捉えた場合、授業研究は、大きく授業を創造する研究と授業を説明する研究とに分けることができる。梅津も、基本的には同じパラダイムの中で、授業研究のあり方を捉えていると言える。

さらに草原は、図1中の「授業理論」と「授業モデル」が教科教育実践学を原理的レベルでとらえた目的合理的な授業の認識をめざす教科教育論、さらにそれらをもとに具体的な授業場面を想定して加工した状況整合的な授業の設計が「授業計画」であり、教科教育法となる。そして学習集団の掌握とコミュニケーションなど、実際の子どもの関係構築的な授業の遂行が「授業実践」であり、教科教育術となると、それぞれのつながり、関係性を入れ子構造として示しつつも、研究方法を分けて捉えようとした<sup>3)</sup>。

一方、このような従来からの授業研究の方法論に対して、学校教育実践への貢献という観点からの反省が迫られるようになった。具体的には、授業開発研究が授業理論と授業モデルの提案に留まり、多様な学校現場の状況の中で必ずしも貢献するものとは言えないという批判、またその有効性の検証が十分でないという批判、さらには、本来現場の状況に応じて理論と実践を創出している実践者に対して、研究者が望ましいと考える「理論の枠組み」を押しつけてしまいがちになるという危惧が挙げられるようになった<sup>4)</sup>。

### 2 授業研究フォーラムの開催とその概要

このような状況の中で、全国社会科教育学会の研究大会では、2015～2017年度の3年間にわたり、「社会科授業研究の語りを拓く」という主題で、授業研究フォーラムが開催されてきた。例えば、2016年3月19日開催のフォーラム「社会科授業研究の語りを拓く—理念・理論・状況の葛藤を視点

として一」では、次のような趣旨のもとフォーラムが開催された<sup>5)</sup>。

趣旨：私たちはこれまで、よりよい社会科授業実践のありかたを求めて、授業理論の構築とそれにもとづく実践モデルの開発を積み重ねてきました。

しかし、近年の学校・子どもたち・教師たちをめぐる教育現場の多様化は、一般的な理論と開発による実践の語りだけでは捉えきれない実態も生み出しています。私たちの社会科授業実践のさらなる質的向上、より広汎な他者との実践の共有、よりよい社会科授業実践の拡大をめざし、社会科授業実践の研究的語りのあり方を模索します。

また、2017年3月18日開催のフォーラム「社会科授業研究の語りを拓く2」では、図2のようなマトリックスを用意し、以下のような趣旨で開催された<sup>6)</sup>。

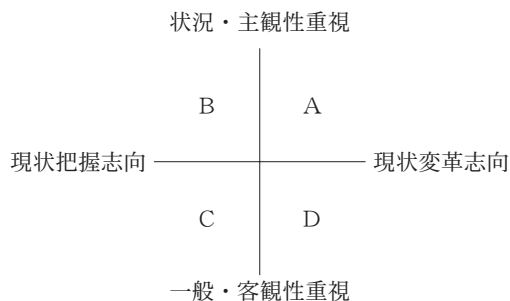


図2 授業研究の志向

趣旨：「なぜ社会科授業の研究をするのですか？」という問いに対して、私たちの多くは「今の社会科の授業をもっといいものにしていきたいから」と答えることでしょう。それは、私たちが実践者でもありながら研究を行なうときの、おそらく、今も昔も変わることはない「原点」でした。

その意味で、「どうなっているのか？」という「現状把握」を問いの起点にする従来の心理学や社会学の研究とは異なり「社会科教育研究」は常に「どうしたらいいのか」「どうしていけばいいのか」といったように、現状を変えていきたいという「現状変革」の志向が強い研究分野だったと言えます。

それは、今も昔も、たぶん未来においても変わらない「原点」だといえます。

ところが、今日、さまざまな脈絡の中で、「研究のあり方」の視点が変わりつつあります。

学校や地域状況や子どもたちの状況、教員の状況の多様化によって「一般的な現場」が想定しづらい社会になってきました。

また、「研究」そのものも大きな変化がおり、社会的構成主義の勃興によって「一般性・客観性重視」という認識だけでなく、「状況性・主観性」を踏まえた研究やその記述のありかたも重要となってきました。

いわば、社会科教育研究は、従来「D」を志向してきたのですが、一方で、「A」の方向の可能性を志向していく必要も生まれてきています。私たちは、「授業をもっといいものにしていきたい」という原点を大切にしながら、それをどのような「研究としての語り」にしていけばいいのでしょうか。

参加者の皆さんで、議論を深めていきたいと思えます。

この一連のフォーラムは、社会科授業研究の従来のパラダイムを踏まえつつも、それらも含めて問い直し、授業研究を多様な授業現場の状況や授業者の信念・社会科授業観などを、よりトータルに捉えようとする新たな展開の一つと言える。

ピーター・M・センゲは、図3のような省察のシングルループとダブルループを示している<sup>7)</sup>。ダブルループ（2重ループ）の振り返りで「現在採用されている規範や前提が適切かを問いかけることによって、行為のための新しいアイデアや可能性の扉を開く。」<sup>8)</sup>と述べている。

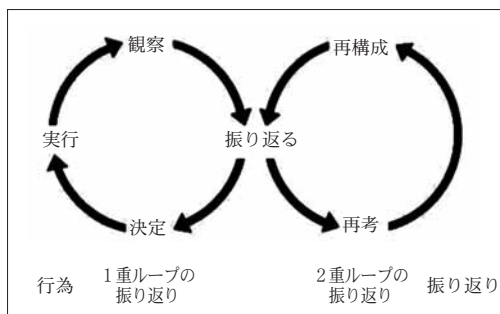


図3 省察のシングルループとダブルループ

このフォーラムでは、まさにその学校現場での実践者からの声（語り）に真摯に向き合い、新たな社会科授業研究のための新しいアイデアや可能性の扉を開こうとするものであった。

フォーラムの概要（プログラム）は、以下の通りである（なお、所属は当時のものである）。

#### ① 2015年度フォーラムの概要（プログラム）

2016年3月19日（土）大阪大学中之島センター

##### 第Ⅰ部 トークセッションによる視点づくり

「社会科授業実践をめぐる〈私の理念〉と〈状況的葛藤〉」

語り手 佐藤章浩（鳴門教育大学附属小学校）

聞き手 南浦涼介（山口大学）

##### 第Ⅱ部 参加者によるワークショップ

「社会科授業実践の〈私の理念〉と〈状況的葛藤〉への挑戦」

コーディネーター 加藤寿朗（島根大学）、  
中本和彦（四天王寺大学）

##### 第Ⅲ部 ディスカッション

「社会科授業研究の語りをめぐる」

コーディネーター 峯 明秀（大阪教育大学）

コメンテーター 柴田好章（名古屋大学）、  
原田智仁（兵庫教育大学）

全体総括 梅津正美（鳴門教育大学）

#### ② 2016年度フォーラムの概要（プログラム）

2017年3月18日（土）大阪大学中之島センター

##### 第一部 実践を語る、実践を聞く

語り手 坂田大輔

（徳島大学・元鳴門教育大学附属小学校）

##### 第二部 ワークショップ：自分の実践を研究的に語る

##### 第三部 総括としての「社会科授業研究」の語りの未来と可能性

吉川幸男（山口大学）

全体総括 梅津正美（鳴門教育大学）

#### ③ 2017年度フォーラムの概要

2017年11月28日（火）広島大学

全国社会科教育学会第66回全国研究大会

コーディネーター 梅津正美（鳴門教育大学）

基調提案者 南浦涼介（東京学芸大学）

ファシリテーター 加藤寿朗（島根大学）、

中本和彦（四天王寺大学）

総括討論 峯 明秀（大阪教育大学）

2015年度、2016年度のフォーラムでは、授業実践者の語りを表出してもらうため、ワークショップをワールドカフェ形式で行い<sup>9)</sup>、模造紙に語り（の一部）を書いてもらいながら、ディスカッションを行った。2017年度のフォーラムでは、ここまでの研究成果を学会の場で発表し、フロアの参加者からご意見をいただいた。

### 3 本研究の目的と方法

本研究では、以上のような社会科授業研究の現状と課題およびフォーラム開催の趣旨を踏まえながら、これらのフォーラムで行われたワールドカフェ形式によるワークショップで作成された模造紙に着目し、そこにみられる実践者の社会科授業についての語りの分析を通して、「実践の理論化」に向けた社会科授業研究の研究課題を探索することを目的とする。

模造紙にこだわったのは、大きく二つの理由からである。一つは、模造紙の記述には、ワークショップに参加した参加者の強いこだわり（主張）が残されているのではないかと。二つは、近年、教員研修の場などで模造紙を活用した研修や授業後の研究協議などが行われているが<sup>10)</sup>、そのほとんどが死蔵されているのではないかと考えたからである。特に前者については、もちろん、参加者が対話した生の声を取り上げ、分析することも重要であろう。また、模造紙、発話記録、両方から分析する方がよりよいかもしれない。さらに、現実として、ワークショップの対話の中で話について夢中になり、その主張は模造紙に記録されないということもあるだろう。それらの限界を承知しながらも、それでも目に見える形で模造紙に残された参加者の記述には、参加者のより純粋な心の内が表現され、貴重な分析資料たり得るのではないかと考えたからである。

本研究では、2016年3月開催の授業研究フォーラム「社会科授業研究の語りを拓く—理念・理論・状況の葛藤を視点として—」でのワールドカフェで作成された模造紙にみられる語りを分析対象とする。なぜなら、このフォーラムのワールドカフェ形式でのワークショップのテーマが「授業づくりの『こだわり』と『ひっかかり』とその乗り越え方」というもので、社会科授業実践の「私の理念」（こだわり）と「状況的葛藤」（ひっかかり）

り)と挑戦(その乗り越え方)という、現場の状況と実践者の信念・社会科授業観に関わるものであるからである。ここから、現場の状況を踏まえた「実践の理論化」に向けた社会科授業研究の研究課題を探索していきたい。

分析の方法としては、KH-Coderを使用したテキストマイニングの分析方法を採用した<sup>11)</sup>。具体的には、模造紙に書かれた大量の自由記述の実践者の語りをもとに、共起ネットワークによってそれぞれの単語の結び付きの強さから、どのような話題が実践上の課題として参加者のこだわりやひっかかりから浮上してきたかを分類し、項目立てを行う。次に、KWICコンコーダンスによって具体的に単語がどのような文脈の中で使われたのかを検証して、項目の内容について精緻化を図り、状況を踏まえた社会科授業研究の研究課題を探索していく。

## II ワークショップ「授業づくりの『こだわり』と『ひっかかり』とその乗り越え方」にみる小学校社会科教育実践上の課題

### 1 小学校教員のワークショップにおける模造紙記述と単語の出現頻度

2016年3月に開催されたワークショップに参加した小学校教員は、年齢や所属も異なる15名であった。グループを3つ(1グループ5人)に分け、ワールドカフェ形式で「授業づくりのこだわり、ひっかかりとその乗り越え方」というテーマでワークショップを行った。

その結果、図4のような模造紙が3枚作成され



図4 小学校グループの模造紙例(1/3)

た。これらに記されたテキストをKH-Coderによって単語の出現頻度を分析すると、次頁の表1のような結果が得られた。

### 2 共起ネットワークによる小学校社会科教育実践上の課題の抽出

抽出された単語がそれぞれどのような結び付きを持っているのか、共起ネットワークによる分析を行った。その結果が次々頁の図5である。

共起ネットワークによる分析によって、参加者のこだわりやひっかかりから、次の①～⑥の話題が実践上の課題として整理できた。

- ① 資料に関すること
- ② 教材に関すること
- ③ 教師に関すること
- ④ 立場や視点に関すること
- ⑤ 経験に関すること
- ⑥ 事象に関すること

### 3 KWICコンコーダンスによる小学校社会科教育実践上の課題の精緻化

共起ネットワークによる分析によって整理された項目に従って、具体的にどのような文脈の中でそれらの単語が使われたかを、KWICコンコーダンスによって具体的に見ていく<sup>12)</sup>。

#### (1) 資料に関すること

図5にみられる小学校共起ネットワークの単語の中から「資料」という単語を取り出して、その前後の言葉を見ていくと、次のようになる。

- ① a 「…資料の矛盾。資料。既有知識の矛盾…」
- ① b 「…どういう資料や立場に立たせるか。…」
- ① c 「…資料を読み取る経験、方法…」
- ① d 「…市の資料が少ない。…」
- ① e 「…3・4年大変。資料が少ない。…」
- ① f 「…子どもに資料を見つけさせる。資料づくり…」
- ① g 「…資料の選び方。読み取らせ方…」
- ① h 「…身近、解決の資料。事例が見つからない。資料の加工。疑問を持たせる。解決。現地に行く。人材をたどる。本にのって人に聞く。資料を読み取る技術。…資料の加工が必要。…」

表1 小学校グループにおける出現回数

| 抽出語  | 出現回数 | 抽出語       | 出現回数 | 抽出語  | 出現回数 |
|------|------|-----------|------|------|------|
| 社会   | 19   | 計画        | 2    | 概念的  | 1    |
| 資料   | 14   | 見える       | 2    | 格闘技  | 1    |
| 授業   | 13   | 見つける      | 2    | 学べる  | 1    |
| 子ども  | 12   | 見る        | 2    | 学級   | 1    |
| 知識   | 7    | 見直す       | 2    | 楽しい  | 1    |
| 教科   | 4    | 見方        | 2    | 楽しむ  | 1    |
| 教材   | 4    | 工夫        | 2    | 葛藤   | 1    |
| 経験   | 4    | 行く        | 2    | 感覚   | 1    |
| 指導   | 4    | 行政        | 2    | 環境   | 1    |
| 事象   | 4    | 実感        | 2    | 関連   | 1    |
| 時間   | 4    | 周り        | 2    | 含める  | 1    |
| 自分   | 4    | 出会い       | 2    | 気軽   | 1    |
| 身近   | 4    | 準備        | 2    | 気付く  | 1    |
| 人    | 4    | 小学校       | 2    | 記述   | 1    |
| 先生   | 4    | 総合        | 2    | 技術   | 1    |
| 地域   | 4    | 多様        | 2    | 疑問   | 1    |
| 読み取る | 4    | 単元        | 2    | 共感   | 1    |
| 難しい  | 4    | 特性        | 2    | 教訓   | 1    |
| 問題   | 4    | 認識        | 2    | 具体   | 1    |
| 理解   | 4    | 年間        | 2    | 形成   | 1    |
| 立場   | 4    | 判断        | 2    | 系統   | 1    |
| 解決   | 3    | 聞く        | 2    | 経営   | 1    |
| 学ぶ   | 3    | 本当に       | 2    | 経済   | 1    |
| 教師   | 3    | 矛盾        | 2    | 激怒   | 1    |
| 研究   | 3    | 面白い       | 2    | 決定   | 1    |
| 考え方  | 3    | 要領        | 2    | 結びつく | 1    |
| 視点   | 3    | 立つ        | 2    | 結果   | 1    |
| 少ない  | 3    | 歴史        | 2    | 検証   | 1    |
| 生活   | 3    | アドバイス     | 1    | 県知事  | 1    |
| 説明   | 3    | アナログ      | 1    | 見せる  | 1    |
| 多面   | 3    | コミュニケーション | 1    | 見つかる | 1    |
| 入れる  | 3    | ツール       | 1    | 見学   | 1    |
| 必要   | 3    | テスト       | 1    | 見直し  | 1    |
| 問い   | 3    | ネット       | 1    | 原因   | 1    |
| 力    | 3    | ノート       | 1    | 現場   | 1    |
| ネタ   | 3    | ノンプロ      | 1    | 現地   | 1    |
| 意見   | 2    | パー        | 1    | 言える  | 1    |
| 育てる  | 2    | ベース       | 1    | 言葉   | 1    |
| 価値   | 2    | マイナー      | 1    | 広める  | 1    |
| 加工   | 2    | モデル       | 1    | 校    | 1    |
| 外国   | 2    | ルール       | 1    | 構造   | 1    |
| 学校   | 2    | 扱い        | 1    | 考え   | 1    |
| 学習   | 2    | 位置付ける     | 1    | 行う   | 1    |
| 学年   | 2    | 意思        | 1    | 行動   | 1    |
| 活かす  | 2    | 育成        | 1    | 合う   | 1    |
| 関係   | 2    | 一人ひとり     | 1    | 国    | 1    |
| 既    | 2    | 課題        | 1    | 参画   | 1    |
| 議論   | 2    | 過多        | 1    | 算    | 1    |
| 距離   | 2    | 会議        | 1    | 使い方  | 1    |
| 教育   | 2    | 解く        | 1    | 使う   | 1    |

(模造紙からKH-Coderにより筆者作成 (頻出150語))

表2 中・高グループにおける出現回数

| 抽出語  | 出現回数 | 抽出語     | 出現回数 | 抽出語  | 出現回数 |
|------|------|---------|------|------|------|
| 授業   | 24   | 見取り     | 2    | 下げる  | 1    |
| 社会   | 14   | 現代      | 2    | 価値   | 1    |
| 子ども  | 10   | 公平      | 2    | 科目   | 1    |
| 生徒   | 10   | 考え      | 2    | 果たす  | 1    |
| 知識   | 8    | 今       | 2    | 課題   | 1    |
| 議論   | 7    | 参加      | 2    | 解説   | 1    |
| 教師   | 7    | 仕方      | 2    | 回数   | 1    |
| 学校   | 6    | 市民      | 2    | 開発   | 1    |
| 学級   | 5    | 持つ      | 2    | 概念   | 1    |
| 経営   | 5    | 実践      | 2    | 確保   | 1    |
| 考える  | 5    | 取り入れる   | 2    | 学生   | 1    |
| 自分   | 5    | 人       | 2    | 学力   | 1    |
| 地域   | 5    | 成長      | 2    | 間に合う | 1    |
| 入試   | 5    | 声       | 2    | 関わる  | 1    |
| 評価   | 5    | 全員      | 2    | 関心   | 1    |
| 問い   | 5    | 多様      | 2    | 関連   | 1    |
| 意味   | 4    | 中学校     | 2    | 基づく  | 1    |
| 疑問   | 4    | 土俵      | 2    | 疑う   | 1    |
| 内容   | 4    | 頭       | 2    | 共有   | 1    |
| 必要   | 4    | 読み解く    | 2    | 教える  | 1    |
| 意見   | 3    | 培う      | 2    | 教育   | 1    |
| 学習   | 3    | 発言      | 2    | 教員   | 1    |
| 関係   | 3    | 方法      | 2    | 教室   | 1    |
| 教科書  | 3    | 目標      | 2    | 興味   | 1    |
| 経験   | 3    | 問う      | 2    | 興味深い | 1    |
| 思考   | 3    | 有料      | 2    | 訓練   | 1    |
| 指導   | 3    | 立場      | 2    | 決まる  | 1    |
| 出る   | 3    | 良い      | 2    | 決着   | 1    |
| 設定   | 3    | 論理      | 2    | 検証   | 1    |
| 階段   | 3    | いろいろ    | 1    | 見える  | 1    |
| 同士   | 3    | どん      | 1    | 見取る  | 1    |
| 難しい  | 3    | やる気     | 1    | 見通し  | 1    |
| 面白い  | 3    | アプローチ   | 1    | 元気   | 1    |
| 要領   | 3    | キャッチボール | 1    | 現場   | 1    |
| 理解   | 3    | クラス     | 1    | 言う   | 1    |
| 歴史   | 3    | サイクル    | 1    | 言わず  | 1    |
| ちがひ  | 2    | システム    | 1    | 個人   | 1    |
| テスト  | 2    | ダメ      | 1    | 口    | 1    |
| ネタ   | 2    | テーマ     | 1    | 構成   | 1    |
| フランス | 2    | トレーニング  | 1    | 考える  | 1    |
| レベル  | 2    | ベース     | 1    | 荒れる  | 1    |
| 違う   | 2    | メタ      | 1    | 行    | 1    |
| 害    | 2    | 悪い      | 1    | 高校   | 1    |
| 革命   | 2    | 扱う      | 1    | 差    | 1    |
| 学ぶ   | 2    | 暗記      | 1    | 採用   | 1    |
| 学問   | 2    | 意識      | 1    | 参画   | 1    |
| 教科   | 2    | 易       | 1    | 史料   | 1    |
| 教材   | 2    | 育てる     | 1    | 思う   | 1    |
| 研究   | 2    | 一部      | 1    | 支える  | 1    |
| 見る   | 2    | 円滑      | 1    | 支援   | 1    |

(模造紙からKH-Coderにより筆者作成 (頻出150語))

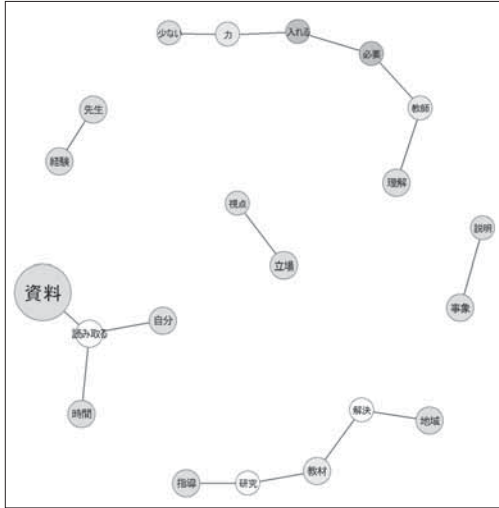


図5 小学校グループ共起ネットワーク  
(KH-Coderにより筆者作成)

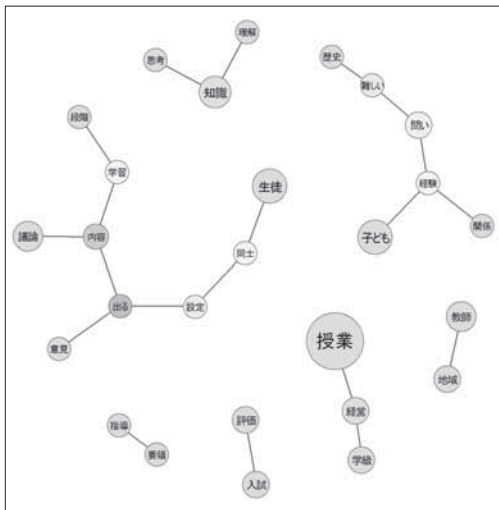


図6 中・高グループ共起ネットワーク  
(KH-Coderにより筆者作成)

「資料」に関する文脈を見ると、大きく三つの実践上課題が見えてくる。一つは、授業者の資料収集の課題、特に身近な地域の資料収集の課題(① d, e, h)。もう一つは、児童に資料を集めさせたり、読み取らせたりする資料内容(視点や立場など)に関する課題(① a, b, f, h)。そして、児童の資料読み取りの技能(① c, g)である。それぞれの課題を問いの形で表すと、「どうやって資料を集めればよいか」「どういう視点や立場の内容を集めたり、読み取らせればよいか」

「どうやって資料読み取り技能を高めたらよいか」となる。

(2) 教材に関すること

「教材」という単語を取り出して、その前後の言葉を見てみると、次のようになる。

- ② a 「…子どもの様子をもとった**教材**研究…」
- ② b 「…社会参画。地域**教材**。問題のもたせ方。問題解決学習。…」
- ② c 「…子どもの**経験**。結びつく。研究成果。**教材**研究。問いと子どもの距離。…」
- ② d 「…ネタの使い方。**教材**。探し方。ネット。本…」

「教材」に関する文脈を見ると、教材と子どもの様子や経験との結び付き、問いにつながる教材の収集に実践的課題があることがわかる。課題は、「子どもの経験や問いに結び付く教材研究を、どのようにすればよいか」となる。

(3) 教師にすること

「教師」という単語を取り出して、その前後の言葉を見てみると、次のようになる。

- ③ a 「…周りの**教師**の理解…」
- ③ b 「…社会科に力を入れれば入れるほど周りから距離ができるような気がする。…生活科との連携を図ろうとすると**教師**間の連携が難しい。先生、みんなの力を入れている教科があるから。マイナー教科感。…」
- ③ c 「…資料の選び方、読み取らせ方。**教師**の出どころ。補助発問。…」

ここからは、現場での教師の社会科教育への関心の低さや力量不足、そのような状況の中での社会科に秀でた社会科教師の孤立感が窺える。課題は、「現場においてどうすれば社会科教師の取り組みへの理解や社会科教育への関心を高めることができるか」となる。

(4) 立場や視点に関すること

「立場」という単語を取り出して、その前後の言葉を見てみると、次のようになる。

- ④ a 「…**どう**いう資料や**立場**に立たせるか。学年団でどうそろえるのか。新任者。…」
- ④ b 「…子どもの**問い**や**気づき**でつながる授業にしたい。子どもが社会を動かす**立場**など。多様な**立場**に立つ授業にしたい。複数の視点で**事象**を見直す。…」
- ④ c 「…二つ以上の**立場**、**事象**が必要。比較により視点を生み出す。…」

また、「視点」という単語を取り出して、その前後の言葉を見てみると、次のようになる。

- ④ e 「…単元計画。多面的な**視点**。授業モデル。対照実験。…」
- ④ f 「…多様な**立場**に立つ授業にしたい。複数の**視点**で**事象**を見直す。…」(④ b と同一)
- ④ g 「…二つ以上の**立場**、**事象**が必要。比較により**視点**を生み出す。…」(④ c と同一)

ここからは、社会科の授業において複数の視点から**事象**を見せたり、多様な**立場**に児童を立たせたりしたいという教師のこだわりが読み取れる。課題は「どうすれば、複数の**立場**や**視点**から社会が見れる授業をつくることができるか」となろう。

#### (5) 経験に関すること

「**経験**」という単語を取り出して、その前後の言葉を見てみると、次のようになる。

- ⑤ a 「…**時間**の問題。探究の**経験**がない子どもたち。先生も含めて。資料を読み取る**経験**。方法。…」
- ⑤ b 「…子どもの**経験**。結びつく。研究成果。教材研究。問いと子どもの距離。気軽に発言できる。…」
- ⑤ c 「…人ひとりの**経験**。知識。既有知識。知識のある児童中心になってしまう。…」

ここからは、(2)教材に関することを見たことと同じような子どもの**経験**を大切にしたい教師のこだわりが読み取れる。

#### (6) 事象に関すること

「**事象**」という単語を取り出して、その前後の言葉を見てみると、次のようになる。

- ⑥ a 「…**歴史事象**を原因と結果の関係で説明できるようにすること。…」
- ⑥ b 「…多様な**立場**に立つ授業にしたい。複数の視点で**事象**を見直す。…」
- ⑥ c 「…自分の言葉で説明できる。会議できるように意見をつくらせるための**社会的事象**の読み取り、かかわりをつくらせることで社会科を通して子どもが成長をすることを**見せられる**ように…努力したい。…」
- ⑥ d 「…二つ以上の**立場**、**事象**が必要。比較により視点を生み出す。…」

ここからは、(4)**立場**や**視点**に関することと同じような教師のこだわりが見て取れる。

### Ⅲ ワークショップ「授業づくりの『こだわり』と『ひっかかり』とその乗り越え方」にみる中・高等学校社会系教育実践上の課題

#### 1 中・高等学校教員のワークショップにおける模造紙記述と単語の出現頻度

2016年3月に開催されたワークショップに参加した中・高等学校教員は、年齢や所属も異なる19名であった<sup>13)</sup>。グループを5つ(1グループ3～4人)に分け、小学校と同様に行った。

その結果、例えば図7のような模造紙が5枚作成された。これらに記されたテキストをKH-Coderによって単語の出現頻度を分析した結果、表2のような結果が得られた。

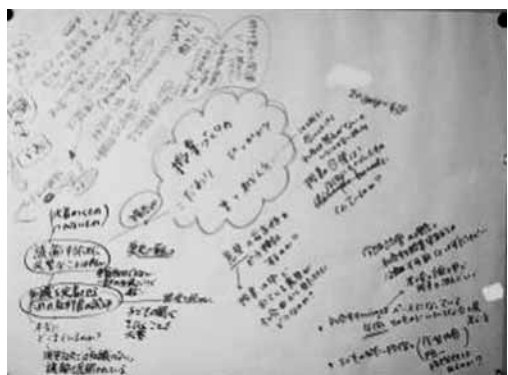


図7 中・高グループの模造紙例(1/5)

## 2 共起ネットワークによる中・高等学校社会系教育実践上の課題の抽出

小学校グループと同様に、抽出語を共起ネットワークによる分析を行った(図6)。

共起ネットワークによる分析によって、参加者のこだわりやひっかかりから、次の①～⑦の話題が実践上の課題として整理できる。

- ① 学級経営に関すること
- ② 内容に関すること
- ③ 知識に関すること
- ④ 問いに関すること
- ⑤ 教師に関すること
- ⑥ 評価に関すること
- ⑦ 指導要領に関すること

## 3 KWICコンコーダンスによる中・高等学校社会系教育実践上の課題の精緻化

小学校グループと同様に、中・高グループで具体的にどのような文脈の中で抽出語が使われたかを、KWICコンコーダンスによって具体的に見ていく。

### (1) 学級経営に関すること

図6にみられる中・高グループ共起ネットワークの単語の中から「経営」という単語を取り出して、その前後の言葉を見ると、次のようになる。

- ① a 「…学級経営の理念と社会科授業実践は分離不可能なはずだけど…。…」
- ① b 「…学級経営、授業実践、円滑にいくかどうか。…」
- ① c 「…公平性の確保。子どもの意見、発言回数。土俵を同じに。授業と学級経営。…」
- ① d 「…学級経営。授業。自分のクラスがやりにくい。…」
- ① e 「…教科と学級経営の間での価値の捉え方をどう考えたらよいのか?…」

ここからは、社会科教師の授業成立に関わる苦悩を垣間見ることができる。課題は、「どのような授業をつくり、行えば、授業と学級経営を両立させることができるか」となろう。

### (2) 内容に関すること

「内容」という単語を取り出して、その前後の

言葉を見ていると、次のようになる。

- ② a 「…子どもの発達段階と学習内容、問い、段階性はあるのか。…」
- ② b 「…生徒同士が議論できる場面を設定すること。多様な考えが出る学習内容を設定すること。立場を設定すること。…」
- ② c 「…議論…様々な内容。構成員のちがいがい。力関係。…」
- ② d 「…入試に出る内容を優先(重要視)してしまう。…」

また、「出る」という単語を取り出して、その前後の言葉を見してみると、次のようになる。

- ② e 「…意見の妥当性をどう検証するのか。授業の中で出てくる意見が社会から見たときにどうなのか。…」
- ② f 「…生徒同士が議論できる場面を設定すること。多様な考えが出る学習内容を設定すること。立場を設定すること。…」(②bと同一)
- ② g 「…入試に出る内容を優先(重要視)してしまう。…」(②dと同一)

内容については、主に、多様かつ現実の社会の中で妥当な意見が議論において出るような学習内容の設定が課題になっていることが読み取れる。課題は、「どうすれば多様で現実的な意見が出る議論を学習内容にすることができるか」となろう。

### (3) 知識に関すること

「知識」という単語を取り出して、その前後の言葉を見してみると、次のようになる。

- ③ a 「…知識を定着させるための教科書の読み。本当にどこまでいるのか?論理を読み解く。現代社会では知識のない議論も展開されている。…」
- ③ b 「…専門性の差。知識のない議論はなしなのか?人によって議論の意味が違う。…」
- ③ c 「…生徒の見取り。主観だけ。事实的知識もテストで見取る。入試。…」
- ③ d 「…定期テスト。知識理解の比率は多い。中学校3年間の訓練。…」



- ③ e 「…教師が自分の頭で考えられないとダメ。コンピテンシーを支える豊かな教科に関わる**知識**を教師は持つべき。…」
- ③ f 「…単なる**知識**理解から脱皮できないネタ。思考力、判断力、表現力を培うネタの開発…」
- ③ g 「…素材のすばらしさを大切にしたい。社会科で必要な**知識**って何？…」

知識に関しては、議論 (③ a, ③ b), テスト (③ c, ③ d), コンピテンシー (③ e), 知識とネタ (③ f, ③ g) と多岐にわたる。まさに、「社会科で必要な知識って何？」という課題となろう。

(4) 問いに関すること

「問い」という単語を取り出して、その前後の言葉を見ていると、次のようになる。

- ④ a 「…なぜ？**問い**。歴史では難しい。…」
- ④ b 「…生活の中にない**問い**では「なぜ」で問うても仕方がないのでは？教師の経験からだけでつくられた**問い**。子どもの経験からなる**問い**はほとんどない。なぜフランス革命は生じたのか？史資料の疑問からつくる。現代につながる**問い**。フランス革命と明治維新とどう違うのか？難しい。…」

ここでは、歴史学習のレリバンスが問われている。「歴史学習におけるレリバンスの高い価値ある問いをどうつくるか？」が課題となっている。

(5) 教師に関すること

「教師」という単語を取り出して、その前後の言葉を見ていると、次のようになる。

- ⑤ a 「…他の**教師**との連携の取り方。…」
- ⑤ b 「…**教師**が自分の頭で考えられないとダメ。コンピテンシーを支える豊かな教科に関わる**知識**を**教師**は持つべき。社会科**教師**による地域副読本づくりと学生のそれへの参画。…」 (③ e と一部同一)
- ⑤ c 「…思考の授業って子どもの頭の中まで見えるの。社会科**教師**の果たす役割って何なの。素材のすばらしさを大切にしたい。

社会科で必要な知識って何？**教師**と生徒のキャッチボール。疑問を口にする。良い授業ってどんな授業。…」 (③ g と一部同一)

- ⑤ d 「…生活の中にない問いでは「なぜ」で問うても仕方がないのでは？**教師**の経験からだけでつくられた問い。子どもの経験からなる問いはほとんどない。…」 (④ b と同一)

ここでは、これまで上述してきた(3)知識に関すること、(4)問いに関することに関連して、教師の役割、重要性(力量)が問われている。「社会科教師の役割や必要な力量って何？」となろう。

(6) 評価に関すること

「評価」という単語を取り出して、その前後の言葉を見ていると、次のようになる。

- ⑥ a 「…**評価**について。評価方法について。…」
- ⑥ b 「…PDCA。**評価**。…」
- ⑥ c 「…指導要領解説を通しての授業**評価**。…」
- ⑥ d 「…**評価**…目指す子ども像？入試？…」

また、「入試」という単語を取り出して、その前後の言葉を見ていると、次のようになる。

- ⑥ e 「…**事実的知識**もテストで見取る。**入試**。…」 (③ c と一部同一)
- ⑥ f 「…指導要領解説を通しての授業**評価**。**入試**。学級経営。…」 (⑥ c と一部同一)
- ⑥ g 「…**評価**…目指す子ども像？**入試**？…」 (⑥ d と同一)
- ⑥ h 「…授業後、面白かったと子どもから声が聞けること。しかし、**入試**に間に合うよう教科書を終わらせることに追われる。…」
- ⑥ i 「…**入試**に出る内容を優先(重要視)してしまう。…」 (② g と同一)

評価については、「授業評価に関わること」と「入試に関わること」の二つに大きく分けることができる。「授業評価をどうするか」と「入試へ現実的に対応しながら授業をどうつくればよいか」という課題である。

#### (7) 指導要領に関すること

「要領」という単語を取り出して、その前後の言葉を見てみると、次のようになる。

- ⑦ a 「…指導要領との関係。…」
- ⑦ b 「…指導要領解説を通しての授業評価。…」(⑥ c と同一)
- ⑦ c 「…学習指導要領は必要なの。…」

ここでは、「学習指導要領との関係をどう考え、対応していけばよいか」が課題となっている。

### IV 模造紙分析が社会科授業研究の研究課題に示唆するもの—成果と課題—

以上のように、ワークショップの模造紙の記述から、テキストマイニングの手法を用いて現場の状況を踏まえた社会科授業研究の研究課題を探ってきた。その成果は、小学校、中・高等学校それぞれ項目ごとに、各研究課題を問いの形で示すことができたことであろう。それらは、これまでも実践の場では語られてきた課題であるかもしれない。しかし、従来それは現場の話であって研究の場では見て見ぬふり、そこには立ち入らないというスタンスがあった。本研究では、まさに、実践者の語りから、状況を踏まえた古くて新しい研究課題を問いの形で示すことができたと言えよう。

加えて、模造紙の記述を、語りのデータとして活用する有効性も示すことができたのではないだろうか。

本研究で示された課題こそ、これまでの社会科授業研究の成果の上に、研究者と実践者が手を携えて解決に向かって協働的に研究を進めていく残された課題を示していると言えるであろう。

#### 註

- 1) 梅津正美・原田智仁『教育実践学としての社会科授業研究の探求』風間書房、2015年、p. i
- 2) 草原和博「教科教育実践学の構築に向けて—社会科授業実践研究の方法論とその展開—」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学の構築』東京書籍、2006年、pp. 35-61

- 3) 2) 参照。
- 4) 梅津正美「社会科授業研究の有効性を問う」『社会系教科教育学研究』第25号、2013年、pp. 91-94
- 5) 全国社会科教育学会平成27年度授業研究プロジェクト事業「社会科授業研究の語りを拓く—理念・理論・状況をめぐる葛藤を視点として—」開催告知ポスター
- 6) 全国社会科教育学会平成28年度授業研究プロジェクト事業「社会科授業研究の語りを拓く2」開催告知ポスター
- 7) ピーター・M・センゲほか(リヒテルズ直子訳)『学習する学校—子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する—』英治出版、2014年、p. 236
- 8) 7) 参照。
- 9) ここで、ワールドカフェ形式と述べているのは、一般に行われるワールドカフェであれば、2~3回メンバーをかえながらラウンドを繰り返すが、今回は時間の制約上、1ラウンド後は自由に回遊する形をとったため、厳密なワールドカフェとはいえないためである。
- 10) 教員研修の先行研究には、例えば、村川正浩編著『授業にいかす教師がいきるワークショップ方研修のすすめ』ぎょうせい、2005年などがある。また、ワールドスタディの手法を用いた教員研修については、石井英真・原田三朗・黒田真由美編著『Round Study 教師の学びをアクティブにする授業研究—授業力を磨く!アクティブ・ラーニング研修法—』東洋館出版社、2017年などがある。
- 11) 社会科授業研究におけるテキストマイニングによる先行研究には、例えば、以下のようなものがある。
  - 峯明秀「マイニング・ソフトの利用による授業事実の抽出」『大阪教育大学社会科教育学研究』第10号、2012年、pp. 21-30
  - 小野間正己「授業コミュニケーションの分析をおとした社会科授業評価—GTMA、会話分析、ポートフォリオ分析をおして—」『社会科教育研究』No. 133、2018年、pp. 1-14
- 12) 本来、KWICコンコーダンスでは、検索語一語につき1行ずつ表示されるが、紙数の関係と、文脈のわかりやすさを考え、同一人物のものは一つにまとめてある。
- 13) 一部大学教員など中、高等学校教員経験者が含まれる。

本研究は、学術研究助成基金助成金(基盤(C)17K04796)「多様な学校現場の状況に対応し得る共同的な社会科授業研究方法論の構築」(研究代表者:梅津正美)の成果の一部である。